

ライフコース疫学における時間依存性曝露の評価方法

ライフコース疫学とは、個人が胎児期から死亡するまでの間に受ける様々な曝露が、長期的に健康に及ぼす影響を研究する学問である。ライフコース疫学では、それぞれの曝露が時を経て蓄積し、相互に影響を与え合いながら疾患を引き起こすという前提を立てているため、時間依存性曝露の評価方法を考慮する必要がある。

抄読会では、ライフコース疫学に特徴的な用語であるリスクの蓄積と誘導期/潜伏期について、また、ライフコース疫学に関連したモデルについて整理する。その後、時間依存性曝露を考慮した例として、Richardson DBらの論文を紹介する。また、実際にライフコース疫学の調査を行なっているエコチル調査についても紹介する。

参考文献

- Kuh D, Ben-Shlomo Y, Lynch J, et al. Life course epidemiology. *J. Epidemiology Community Health*. 2003;**57**:778-783.
- De Stavola BL, Nitsch D, dos Santos Silva I, et al. Statistical issues in life course epidemiology. *Am J Epidemiol*. 2006;**163**:84-96.
- Richardson DB, Cole SR, Chu H, et al. Lagging exposure information in cumulative exposure-response analyses. *Am J Epidemiol*. 2011;**174**:1416 - 1422.